

各務支考と羽島の俳匠たち

各務支考

かがみしこう

寛文五年(一六六五)
 (享保十六年(一七三二))

美濃国山県郡北野村西山に生まれる。別号は、野盤子、見龍、東華坊、西華坊、獅子老人など。九歳の頃、大智寺の雛僧となるが、十九歳で下山する。元禄三年、近江にて芭蕉の門人となる。芭蕉に追随し、卒去の際も終始看病奉仕した。その後、北陸、中国、四国、九州などを巡歴し、蕉風俳諧を普及させる。後、郷里に帰り、教を垂れる。獅子門の始祖と称される。

太田巴静

おおた はじょう

延宝六年(一六七〇)
 (延享元年(一七四四))

美濃国竹ヶ鼻に太田可政の次男として生まれる。父可政は北村季吟の門人であり、兄の夕潮も俳諧に親しんだ。元禄十四年、支考を竹ヶ鼻に迎え、坂倉水石が願主となって、八剣神社に奉納した十二吟歌仙に一塵する。竹ヶ鼻を軸として、大垣の木因門、名古屋の露川門との交流が伺われる。正徳三年、名古屋にて剃髪し庵を結んで立机する。門弟に横井也有、河村秀根、如是庵理然等がいる。墓は、名古屋大須真福寺境内に建てられている。

好々園迂言

こうこうえんげん

天保五年(一八三四)
 (明治三十七年(一九〇四))

羽島郡小籠村の人。通称新之丞、また好々園、縮遠庵、剃髪して迂言坊と号す。明治三十七年夏遺統を継承したが、いまだ立机も開かぬまま九月八日に没した。水が溢れ渇水に苦しんでいた郷土のために用水路建設に尽力し、肥沃な農地をもたらした。美濃派俳諧をリードし、指導的立場にあった。肺結核症に罹り、隔離生活を余儀なくさせられた。その時の歌集「加護能登理」が死後発刊された。

一味庵石田

いちみあんせきでん

慶応三年(一八六七)
 (昭和十四年(一九三九))

羽島郡下中島村石田の人。通称友三郎。号は石田、虹堂、養老仙、慶談、飛華落葉楼。鉄道庁に就職。大正九年四月遺統継承、翌十年四月立机式を行う。北海道から奥羽、関東、北陸、山陰、山陽、四国、九州に至る広い地域に足跡を印し、朝鮮にも門人がいて、分社は全国で百二十四社に及んだという。書画、篆刻、弓道、舞踊等にも長けていた。

盤古庵松柏

ばんこあんしょうはく

明治十八年(一八九五)
 (昭和四十九年(一九七四))

羽島郡下中島村石田の人。本名修一、松柏と号す。大正十三年、下中島水首分社の第二世分社長に就任する。昭和三十一年、獅子門の補佐職に就任した。昭和三十六年遺統継承、四月三十日遷座式、十月八日立机式を行う。

高味石田の高弟であり、俳諧『水音笈』の続刊に尽力し、俳誌『獅子門』を創刊した。

獅子門合同句集『百小竹』参照
 野田千平著『太田巴静と美濃竹ヶ鼻の俳諧』参照

